

福澤諭吉が見た「万博」

幕末期、福澤諭吉は幕府使節団の一員として渡英し、折しも開催中だったロンドン万博を体験している。帰国後、福澤は『西洋事情』で自ら見聞した「万博体験」とその開かれた文化交流の精神を紹介した。福澤が万博に見たその精神が、どのように現代に受け継がれ、未来へとつながっているのか？ 世界中から多くの来場者を集めた「大阪・関西万博」が閉幕した今、あらためて光を当ててみる。

万博の盛況ぶりと意義を日本人に伝えた福澤諭吉

多くの国々が参加する万国博覧会（万博）の歴史は、1851年にロンドンのハイドパークで開催された博覧会に始まる。英国は1862年にも万博を開催し、その会期中に徳川幕府の遣欧使節団が渡英。

使節団の人々はロンドン万博を訪れ、これが日本人と万博の“出会い”となった。

時代とともに変化する日本と万博の関わり方

『西洋事情』出版の翌年、1867年のパリ万博で日本は初の出展を果たした（徳川幕府のほか、薩摩藩と佐賀藩も独自に出展）。会場では日本の陶磁器や漆、和紙といった工芸品や浮世絵などの美術品がヨーロッパの人々の目を奪い、これが「ジャポニスム」の流行など日本文化が世界に広がる大きな契機となったと言われている。

福澤諭吉は、万博会場で大英帝国の圧倒的な国力と文明を目の当たりにして深い感銘と衝撃を覚えた。帰国後に書かれた『西洋事情』初編ではその盛況ぶりを記すとともに、万博は単なる見世物ではなく新技術や新製品を世界に向けて発信する場であり、文化交流や技術革新を促進する重要な催しであるとその意義を解説した。さらに「博覧会は元と相教え相学ぶの趣意にて、互に他の所長（長所）を取て己の利となす」と記し、万博は「智力工夫の交易」であり、世界の人々が国境を越えて学び合うことの重要性を強調している。

日本で万博が開催されたのは二つの世界大戦をはさんでそれから100年以上後のこと。1970年、アジア初の万博が「人類の進歩と調和」をテーマに、奇しくも若き福澤が蘭学などを学んだ緒方洪庵の「適塾」



1862（文久2）年、幕府遣欧使節団の随員としてヨーロッパ歴訪の際にロンドンで撮影（福澤研究センター提供）

1862（文久2）年、ロンドン万国博覧会での遣欧使節団
（『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』より）



があった大阪で開催された。当時の最先端技術と文化が集結したこの万博は戦後日本の復興と発展、まさに高度経済成長期の人々が見た夢を象徴するイベントとなった。

21世紀に入り、2005年には愛知で「自然の叡智」をテーマに「愛・地球博」が開催され、さらに20年を経て万博は再び大阪に巡ってきた。今、私たちは万博開催にどのような意義を見いだせるのだろうか？

現代に受け継がれる「智力工夫の交易」

今回の「大阪・関西万博」が掲げたテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン（Designing Future Society for Our Lives）」、つまり「Saving Lives（いのちを救う）」「Empowering

Lives（いのちに力を与える）」「Connecting Lives（いのちをつなぐ）」というサブテーマに象徴されるように、SDGs達成への貢献や未来社会の課題解決に向けたアイデアや技術の提示を目的としていた。そのため「未来社会の実験場」というコンセプトのもと、先端技術など世界の英知を集め、地球規模のさまざまな課題に取り組むために新たなアイデアを創造・発信する場とすることを目指した。

福澤は『西洋事情』の中で技術は日進月歩だと述べ、新しい知見を学び続けることの必要性を説いた。現代の万博もまた、最新のイノベーション

ョンを世界に提示し、人類全体の進歩に貢献しようと呼びかけられたのである。その際に世界中から集まってきた来場者が単に展示を見るだけでなく、それぞれがアイデアを交換し、未来社会を「共創」する機会の創出が積極的に図られたことが今回の万博の大きな特色だろう。

時代とともに万博の在り方は変わっていく。しかしその根底には福澤がその重要性を指摘した「智力工夫の交易」が確かに受け継がれ、より進化した「共創」へと結実した。今回の万博において、世界中の人々が知恵を寄せ合う姿から多くの万博来場者がそのことを感じ取ったに違いない。

福澤の時代から続く万博を舞台にした知の交流は、私たちに新しい未来を創造する力を与え続けている。163年前に「ロンドン万博」で大きな感銘を受けた福澤が、「大阪・関西万博」にさまざまな形で参加・貢献した慶應義塾の研究者、塾員・塾生たちを知ったなら、いったいどのような感懐を覚え、何と言ったのだろうか？ そんなSF的な想像をしてみるのも楽しい。



『西洋事情』（福澤研究センター提供）